

# 東 大 百 年 史

今 井 功 (物理)

いまから4年後の昭和 52 年すなわち 1977 年には東京大学は創立 100 周年を迎える。これを記念するために「東京大学創立記念事業準備委員会」が発足したのは昭和 42 年 (1967) 5 月のことであった。続いて同年 7 月には「東京大学百年史編纂準備委員会」がその第 1 回の会合を開き、史料編纂所長の竹内理三教授が委員長に選任され、数回の会合を経て翌昭和 43 年 (1968) 5 月には百年史編纂の基本要綱案がほぼまとめられた。これを受けて 6 月には当理学部でも、「東大百年史編集理学部委員会」が組織され、毎月第 2 水曜日に定例的に集まることになった。その第 1 回は 7 月 10 日であった。9 月、10 月と定例会は順調に進むように見えたが、予定された 10 月、11 月の例会は開催されないままに終わった。東大紛争の激化のために百年史どころではないという学内情勢になったからである。

理学部委員会のメンバーは、河田 (数)、今井 (物)、末元 (天)、浅田 (地球)、藤原 (化)、高宮 (化)、木下 (動)、門司 (植)、渡辺 (直) (人)、高井 (地質)、竹内 (鉱)、吉川 (地理) の諸氏であった。東大百年史編纂準備委員会へ理学部から小生が出ていた関係で、理学部委員会での世話役を引き受けたわけである。

昭和 43 年に激化した東大紛争のため百年史編纂の作業は中絶の状態になった。ようやく最近、「東京大学創立百年記念事業企画委員会」が新しく設けられた。紛争による空白の期間はまことに惜しい。百年史編纂委のメンバーも半数以上退官された今日、どのような形で再開されるか明らかでない。また百年史そのものの実現についてもあやぶまれる現状である。しかしこの時点で当初の構想を想起することも無意味ではなからうと思われる。

「東京大学百年史編集の基本要綱案」から抜き書きすると、「編集の目的」は、「わが国の近代国家および近代社会の発展に中心的役割を果たした人材育成の場としての東京大学および学術発展の指導的役割を果たした学問研究の府としての東京大学の果たした歴史を明らかにするとともに、将来の大学のあり方についての考察にも資する」とうたわれている。また「編集・執筆の基本方針」とし

ては、(イ) 大学の制度史考察は勿論であるが、むしろ東京大学および東京大学関係者のわが国の国家社会および学術発達への寄与、影響等に重きをおく。(ロ) 資料の収集は各部局に固有の資料は勿論、ひろく新聞・雑誌等にあらわれた東京大学および東京大学関係者に関する記事等もすべて収集する。(ハ) 資料は、文献資料のほか、生存長老・関係者からの聞きとり、絵画・写真・遺物等あらゆるものを含む。(ニ) 各部局委員は、各部局固有の(ロ)、(ハ)の資料の収集、編纂、執筆を担当し、本部委員は、東京大学全般に関する(ロ)、(ハ)の資料も収集、編纂、執筆する。各部局委員は、(ロ)、(ハ)のうち、各部局の果たした学術的役割についてとくに重きをおく、などが挙げられている。

「百年史」の規模は、総巻数全 20 冊 (各冊 A 5, 600~1000 頁), A. 通史編: 1~5 巻 (東京大学前史, 明治 10 年まで; 明治 30 年まで; 大正年間; 昭和 22 年まで; 以後). B. 各論編: 6~10 巻 (各部局の学術研究発達史), 11 巻 (学生史), 12 巻 (建築史), C. 資料編: 13~16 巻. D. 別編: 写真集, 百年史概説, 英文百年史, 百年史年表, となっている。

1977 年まではあと 4 年足らずしかない。上記の構想をそれまでに実現することは到底不可能であろう。しかし、100 年史そのものが 1977 年に完成することも必ずしも必要ではなからうと思われる。たとえば、「東京帝国大学五十年史」が発行されたのは昭和 7 年 11 月で、創立満 50 年の昭和 2 年より遅れること 5 年であった。全東大の 100 年史の実現はともかく、われわれ理学部としては 100 年の歴史を省ることは極めて有意義のことであろう。この機会に各教室の歴史的資料をできるだけ集めておきたいものと思う。とくに名誉教授をはじめ長老の先生方をお願いして、教室にまつわる逸話のたぐいなどもメモの形にでもして残して頂ければ幸いである。理学部便覧や理学部会誌、あるいは各教室の行事記録なども貴重な資料であろう。とくに、最近数年間の紛争に関する各種の文書は東大百年史のうち最も重要な激動期を示す資料として散佚を防ぎたいものと思う。